エンペラードラゴン・マスター

okiru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エンペラードラゴン・マスター

【Ｎコード】
Ｎ８０５６Ｃ

【作者名】
ｏｋｉｒｕ

【あらすじ】
ドラゴンの中で最強と言われるドラゴン・皇帝竜ことエンペラードラゴン。昔交わされた約束によりドラゴンの守人ベルフィナの娘リンがエンペラードラゴン達と共に父の生まれ故郷の国ウェンゼルナへと旅立つ

プロローグ

―プロローグ―

ヴィクトリア大陸にあるヴォンセンヌ地方、この地方は非常に暖かい。その地方の中心にある大国ウェンゼルナ・・・そこは水源と緑・・・豊富な資源にも恵まれたとても美しく不思議なことに天災も起きない、女神・ウェスタベルタに守られし国で有名であった。
だが、約１０００年続いたこの国も我が手に入れたいとする貪欲な大臣の手によりその地位を奪われた

王家の血筋は絶えたと思われたが，王妃と幼き王子は難を逃れ生きていたのだ。

王妃はボロボロになりながらも王子を連れてある場所へと向う。
その場所はヴォンセンヌ地方より遥かに北にあると言われている「彼方の地」と言うドラゴンが住まう場所・・・しかし、そこに辿り着くまでは高い雪山を登り越えて行かなければならなかった。

　王妃と王子は５つ目の雪山を歩いていると氷でできた洞窟を見つける。
回りの氷はキラキラと光りダイヤモンドのように美しいが、まるで何者も近づけさせない冷たさを持っている。

やっとの思いで辿り着いた最後の砦だが、その頃には王妃はもう虫の息だった。幼き王子は母を支えながら冷たい風が流れてくる洞窟の奥へと進む…どれくらい歩いただろうか？洞窟の奥のほうから光

が見え始め周りの氷が七色に輝きだす、出口に辿り着いたのである。
洞窟を抜けるとそこは雪がなくなり目の前には青々とした草原が広がっていた。
王子は母を連れ草原に一歩踏み出そうとした時どこからか声が聞こえてきた。

「この地に足を踏み入れるという事はその身が滅びてもよいと言う事か？」
声がした方を見てみると、洞窟の出た上の岩場を見上げると１７歳くらいだろうか？一人の少女が座っていたのだ。

髪の色はオレンジ、瞳は金色だ。
「お前達は禁を犯しているのは重々承知か？ここは（彼方の地）決して人間が入ってはいけない場所だ。」

王子は恐る恐るその少女に声をかけた。
「母上が病気みたいなのです、どうか助けてください。」
少女はじっと少年の方を見た後、少年が支えている王妃の方を見て目を細めた。

「その者…もう助からぬぞ？」
「え？」
王子は目を大きく見開いて少女を睨んだ。
「うそだ！？」

「…本当よ…私は…もう…」

今にも消えてしまいそうな小さな声で王妃は息子の耳元で告げた。
崩れてしまいそうな細い体を最後の力を振り絞るかのように王妃は凛として少女を見上げる

「私はウェンゼルナ国ウェルト家が妃・リザベルーテです。王家に伝わる言い伝えの通りこの地へと参りました。」
王妃はそう言いながら胸元から何かを取り出して頭上へと掲げる。
「ここにあるのがその証・・・最強のドラゴンの角で作られたペンダント…これ何かはご存知でしょう…」
そう聞くと少女はピクッとした。
そのドラゴンの角で出来ていると言うペンダントは中がくり貫かれベルのような形をしている。
そしてそのペンダントが風に揺られる度に心地よい音がする

「そうか、どおりでそのお前達血からは懐かしい香りがするはずだ…ヴェンゼルナの王家の者だったのか」
少女は呟いた後、その顔は少しだけ強みがなくなった。
「ところでお前達は何しにここへ来たのだ？いかに王家の者であろうが近づいてはならぬと知っておろうに」

王妃は必死の思いで目の前にいる少女に伝えはじめた
ウェンゼルナが大臣によって奪われ王家の者は自分と王子を残し殺されてしまった事
「どうか、ウェンゼルナの血を絶がえぬ為、また王家を復興する為の力をお貸しください・・・」

「…今ドラゴンは繁殖の時期に入っている、オスのドラゴンは役目を終え殆どが眠りにつき、メスのドラゴンは卵を宿している状態だ・・・動けるになるまで２０年近くにはなろう…それでも良いというのか？」

「…そこまで言うのならば」

少女は少し考えた後、王妃に向ってこう告げた
「王妃よ、そなたの命は永くない…その身、子を宿した后妃竜達に捧げてはくれぬか？」

「なっ！！」
それまで黙って聞いていた王子だったがその一言を聞いた突如険しい顔になった。

「・・・なんだ？小さき王子よ？」

「捧げろってどう言う意味だよ！！」

「その身…血と肉を后妃竜達に喰われろと言っておるのだ‥」
「！？」

王子は一瞬小さな手で拳を作り身構えたが、王妃の手がその拳を止めた。

「もう幾許かもない命、そしてウェンゼルナの王家の血を引く者、霊力もありそうだ…もし后妃竜達がその身を喰えば強い力のドラゴンが生まれるに違いない…」
「それに従えば、王家を復興させる手助けをきっとその子供達にもさせよう・・・どうだ？悪い話ではあるまい。」

王妃は霞んで見えなくなってきている目を見開く

「分かりました。我が身を后妃竜達に捧げましょう・・・この子と王家の為に。」
横で聞いていた王子は身を震わせながら母の腕を握り締め、涙を浮かべて見上げる

「ごめんなさい、アスベル・・・・お前と王家の為なの、これから一人になるけど逞しく・・・強く生きて、そしていつか王家を復興させて下さい。」

「…母上」

(御免なさい…アナタを道連れにする母様を許して…)

心の中で王妃は呟きながらそっとお腹の上に手を添えるのだった

「では王妃よ、お前は一人でこの先に進むがよい。この先に后妃竜達が住まう泉の辺がある…今までの会話は后妃竜達に聞こえていただろうからな…」

「はい…」

よろよろとしながらも歩き出す…数メートル程進んだ辺りで一度王子の方に向き優しく微笑むと王妃は霧に包まれ中へと消えていった。

「ははうえー」

王子は地に手をつき瞳に涙を浮かべながら大きく叫んだ。

「母の骨を花が咲く綺麗な丘に埋めてあげよう…」

少女はそう呟く、先程までとは違って冷たい表情ではなくなっていた。

「…どうして貴女がそんな悲しそうな顔をするの?」

「…私の名はベル…ベルフィナ」

王子はその名を聞いてハッとなった。
ベルがつく名はウェンゼルナ王家の者しかつけられぬ名であり、はるか昔、皇帝竜（エンペラードラゴン）に嫁いだ王家の姫が産んだ子供の名前を

「そんな…まさか？」
「お前の母の骨を我が母が眠るこの地の一番綺麗な場所に作ってやる。花が一年中咲く綺麗な場所だ…」
そう言うと先程王妃が持っていたのと同じようなペンダントを取り出しそっと手をあてた、すると光の玉が中に吸い込まれていく。
「このペンダントによって願えば母の墓への道を開く鍵となろう…」
ベルはそっと王子の首にペンダントを下げる、すると王子は小さな手でペンダントを握り締め、声をあげ泣き崩れたのだった。

1話（よろしくお願いします）

ここはラキ大陸にあるパーディ国のフォトンという小さな町。
特別何か有名なものがあると言うわけでもない平凡な町だ。

季節は春、澄み切った青い空を小鳥達も嬉しそうに追いかけっこしながら飛び回っていた。

「ちっ・・いい気なものだぜ、俺だって空から探せばこんな町なら一発で探せるのになぁ。疲れた：確かこの辺りだよな？ベルの子供が住んでいるのって」

空を見上げながらぶつぶつと呟いている少年が一人、見た目が１６歳くらいだろうか？目は大きく瞳はオレンジ色、髪の毛は金色だが光の加減でオレンジ色にも見える。
髪型はボサボサで後ろ髪はそんなに長くはないが一つに纏めている。こいつがモテルタイプ？と言われるとビミョーだろう：きっと。

「あふ…うーん天気もいいし何だか眠くなってきたなぁ」

歩いているうちにどんどん町の中心から離れ周りの景色は広い庭がある小さな教会らしき建物が建っていた。

「ありゃ…町外れに出ちまった」
「…まぁいいか。急ぐ事はないしこの辺りで休憩～休憩♪いい芝生だし、ここなら茂みに隠れて見えないし」
少年は横になり気持ちよく眠りに入った。

キャッキャッ
しばらくすると教会から一人の少女とその周りを取り囲むように子供たちが出てきた。

「ねぇシスターリン今日は僕達と木登りしようよ」
「え～？私とお飯事をするの」
女の子1人、男の子が3人の6歳くらいの子供に囲まれ、シスターリンと呼ばれている少女は15歳くらいだろうか？長く明るい茶色の髪に赤い大きなリボンで一つに後ろで縛っていた。目が大きな可愛らしい少女だ。

「はいはい、今日はお庭の草刈をしないといけないの、遊ぶのはそれが終わってからよ？」
「えぇ～？！」
「だって、ほら神父様もお腰を悪くされてお世話になっている私がしないと…ネ？」
リンは優しく子供達に微笑みながら宥める
「ハ～イ…」
「シスターリン、バイバイ～」
子供達はリンの言うことを素直に聞いて町の方へと走っていった。

リンは駆けていく子供達を見送りながら小さく手を振る。
「さて、がんばりますか」
そう言うとリンは縛っているリボンをキュッと締め手に鎌を持った。

「えーっと、どこから刈ろうかしら」
辺りをキョロキョロすると茂みの間に枯れた草が出ているのを見つけた。

「あら…取りあえずこの草を刈りましょう♪」

リンは枯れた草を持ち鎌で思いっきり切る。

「イテェーーー！！」

いきなり大声を上げて茂みの中から人影が現れた。

「え…？」

行き成り大声を出しながら目の前に人が現れて、リンには何がおきたのか分からなかった。

「なっ！何しやがる！！こいつ！？」

現れたのは先ほど芝生の上に昼寝を始めた少年だった。

「あ、あら？」

リンの掌にある雑草を見る。いや、雑草ではなくどうやら少年の後ろ髪？だったらしい

少年はリンの手にある物体をみて自分の頭の後ろを触って確認をした。

「ない！？ナイナイナイ！！オレのツノォォ～」

少年は顔が青くなり、後ろ髪を手でかき乱した。

「ごめんなさい、まさか人の髪の毛だなんて思わなかったものですから…その雑草かと思って切ってしまいました。」

少年はジロッとリンの方を見ると

「髪じゃねぇー！！この女！！これは俺の大事な角だ！！」

「はい？」

角と言われてリンはわけも分からず目をパチクリさせた。

「髪の毛ではないのですか？」

「ちっがーう！！オレ様を誰だと思っている？こんな人間の姿をし

ていても、オレ様はドラゴンの中の最強のドラゴン！！皇帝竜、エンペラードラゴンだぞ？！」
「はぁ…ドラゴンさん？それは申し訳ないことをしました」
そう言いながらリンはぺこりと頭を下げた。

（こいつ…もしかしてアホか？つい我を忘れてドラゴンと名乗ってしまったが…普通ドラゴンって聞くと恐がって逃げるか腰を抜かすのに…）
少年は驚かないリンじっと見つめた。
「あークソッ、これじゃあベルの子供も捜せねーよ！！」
少年は右手をズボンのポケットに入れ、左手で頭をかきながら町の方を眺めた。

「まぁ、偶然ですわ？私の母の名もベルって言いますのよ？正式名はベルフィナですけど」

「へぇそう…偶然だな～ベルフィナの子供…っておいっ！？」
頭をかきながら混乱していた少年はニコニコと微笑む少女を見た。

「お前今なんて？」
「はい、母の名前はベルフィナって言いましたのですわ」

少年はそれを聞き目が点になった。
（…マジか？このトロそうな女が…あのベルの娘？ドラゴンの間で『死者を送る鎮魂の鐘』と言われ恐れられた？）

「ち、ちなみに父親って」
リンは思いっきり微笑んで
「はいっアスベルって言いますの」

（ぎゃーやっぱり！！）
少年はその名を聞くと頭を抱えながらしゃがみこんだ
「あのぉ、そう言えば自己紹介がまだでした」
リンは少年の顔を覗き込む。
「あ…？」
少年はしゃがみ込んだ体制で少女の方を見上げる。
「私の名前はリンと言いますの、エンペラードラゴンさん」
一瞬日差しの為かリンの髪の色がオレンジ色に見えベルと重なった。
「オ、オレの名前はレンタイト、太陽の皇帝竜だ」
「エンペラードラゴンさんがお名前じゃなかったのですね？」
「おいおい、当たり前だろう？レンタイトが名前だよ」
「あは、そうですよね？すみませんレンタイトさん」
リンは恥ずかしそうに頬を赤らめて照れ笑いを浮かべた
「まっ、いいけどよぉ…」
つられてレンも頬が赤くなる
「それじゃぁ、これでもうお友達ですね？よろしくお願いします。」
そう言うとリンはそっとレンタイトに自分の手をあててやさしく包み込んだ。

2話（行ってきます）

「どうぞお入りください」
教会の裏にレンガでできた住居があり、リンは木のテーブルと椅子のある部屋へとレンを案内した。

「どうぞお掛け下さい」

「あ？ああ」
レンは木の椅子に座ってキョロキョロ見渡す

「今お茶を用意しますね」
パタパタとリンは奥にあるドアを開けレンのいる部屋を出て行った。

（なんだか話がまるで違うぞ？まさか教会にいるなんて聞いてないし、それに俺達ドラゴンが教会苦手だってベル知っているだろ？）

（まぁ、俺みたいにエンペラードラゴンで力が強いと教会なんて屁でもないけどね♪）

（しかし…あのリンと、他の人間？色々な人間の匂いはするが…あいつらの匂いしないな？）

コンコン
「お待たせしました。」
先程出て行ったドアからリンがトレーの上にティーポットとカップを持って入ってきた。

「どうぞ」
レンの前に入りたての紅茶が置かれる
「どうも…」
レンはカップを手に持つと匂いをクンクンと鼻で嗅いだ。
ベルや仲間に話には聞いていたが、今まで生きて来てお茶を出された事、ましてや飲んだ事すらなかったのだ。
「ところで…えっと、レンタイトさん？」
リンはレンの向かえの椅子に座り手を膝の上に置いて話しかけた。
「レンでいい、それでなんだ？」
コクン、紅茶を一口レンは入れた
（へえ、結構いけるな…人間の飲み物も悪くない）
「今日はどの様なご用件でこちらに？もしかして旅の途中で？あ…でも、私の両親を知っているみたいですが？もしかして何か悪い事され、父に退治されて観念し正しき神の道へ向かう為に懺悔しに来られたとか？」
リンは目を輝かせる、それを見てレンは目が点になった。
「はぁ？なんで俺があのオヤジに退治されるの？それにアイツの方が悪徳そのものでは？じゃなくて、そんな事より俺はベルの子供…つまりあんたとあんたの兄ライオットに会いに来たよ、特にライオットに」
（　あの俺様ヤローに…成長して少しは性格変わっていてくれよ？）
「まぁ、兄様もご存知なのですね」
リンは嬉しそうにニコニコ微笑んだ。

「あ…あぁ…」
（昔はよくイジメラレテ…）
レンの頭の中に苦い思い出がよぎる

「残念ですわ、兄は８年程前から不在なのです」

「ふ・・不在？・・・・って８年？！」
「えぇ、私が幼い時に父の知り合いの家に…ついでに言いますと、お父様も５年前に出かけたきりまだ帰ってきていませんの」

「連絡は？」
「ないですわ？でも出かける時はすぐ戻ってくるっておっしゃってまし、連絡はできないけど心配はしなくて大丈夫だって…それに神様がきっとお父様を見守ってくれています、私お父様が無事で居ますようにと毎日教会でお祈りもしていますから」

（オッ、オイオイオイ；；）
「それってさ、行方不明って言わないか？」

「はぁ、でも行き先はウェンゼルナ国と言っていましたから、行き先はわかっていますし」

（な・・・ウェンゼルナ国行って帰ってこないって・・そりゃやばいんじゃぁ・・・）

「あのさ、あんた自分の周りで変な事とかなかったか？」
「え？変な事ですか？」
リンは暫く考え込んで何か思い出したのか手をたたいた。

―ポンッ―
「そう言えば、二件先のユウさんの所のお爺さんが入れ歯盗まれたとか言っていました」
「そうじゃねぇ…えっと、あんた身の危険を感じるような事はなかったか？と聞いているのだけど？」
リンはレンが言っている意味がわからないのかキョトンとした顔をした。
「だから命が危なかった事なかったか？っと」
「命ですか？あ…一度自分の不注意で川でおぼれ掛けた事はありますわ？7歳くらいの時なのですがお気に入りのハンカチが流れて行ってしまって拾おうとして…」
「あっ！！でも黒くて長い髪の男の方に助けて頂いて」
「あーっもういい…」
レンは自分の手をリンの口の前に当てた
（…まだ大丈夫そうだな）

―ガタン―
レンは椅子から立ち上がった
「よし！！決めた」
「はい？」
リンの手を掴むとレンは外に連れ出そうとする。
「ど、どこに行くのですか？！」
「決まっているだろ？この町を出るんだよ？そしてウェンゼルナ国に向かう！！」

「はっはい？」
突然のレンの行動にリンは呆然と引き摺られていたが、ハッと我に返り足に力を込めてレンの行動を止めた。
「ちょっ！！放してください！？」
レンの手を振り払う
「ダメです！！お父様がいい子で待ってなさいって言われましたわ」
掴まれ少し赤くなった腕をさすりながらリンはレンの方を見た。
「いや、あのさお前の親父ウェンゼルナ国行って行方不明になっているんだぜ？心配じゃないわけ？アニキの方もだけどさ」
「し、心配ですけど…でも」
「お父様は強いから必ず帰って来ますもの…」
そう言うとリンは今にも泣きそうな顔になり俯いた。
「だけどさぁ、5年だぜ？それに刺客がもう町に来ていてお前の様子を伺っているかもしれないし」
「刺客ってなんですか？」
聞きなれない言葉に泣きそうになっていたリンは目をパチクリさせレンのほうをジッと見た。
「お前、まさかと思うが自分の身の上まったく知らないのか？」
リンはレンの言葉に首を傾げる。
レンは頭をボリボリとかきながらため息をする
「えーっと…おさらいね？あんたの親父はアスベルで母親はベルフィナだよな？」

「はい、間違いありません」
「じゃあ、あんたの血筋だけど…お前の父親は」
「私の父は傭兵をしていますわ？まぁ、主に用心棒らしいですが」
「いや、それは今の職業であって血筋なんだけど？」
二人は顔を見合わせる
「？私何も聞いた事ありませんもの・・一緒にいる時間が殆どありませんでしたし」
リンの顔が俯く
「本当に本当か？」
「はい」
（はぁ？まさか何も知らせてないなんて…アスベル何しているんだよ？こいつに血筋やら今までの事話すのも俺の役割ってか？）
（しかしこれでも俺口ベタだから…どっから説明すればいいんだよ？）
レンは顔の眉間にシワをよせ一人でブツブツと言っている。
「あのぉ？」
それを見てリンはレンに声をかけてみた。
「あっ・・」
その声を聞いてハッとレンは我に返る、そしてリンと目が合ったがリンはレンから目を逸らした。
「い、いえ・・なんでもないのです」
「あのさ」

レンは“ふう”と溜息をつくと自分が知っている事すべてを話したい
リンの母親ベルフィナがドラゴン達の長である皇帝竜と人間の間に
生まれた娘でドラゴン達の守人であること、父親がウェンゼルナ国
の第一王子で国が大臣によってのっとられた事・・・など

「そうだったのですか、そんな事があったなんて…」
リンは父親と母親の過去の出来事と自分の身の上を知った為か悲し
げな表情を見せた。

「まぁな、もしかしたらお前の身を案じ何も教得なかったかもしれ
ないな」

「そう言えばお母様、お母様も遠くで暮らしていると聞いたのです
が…レンさんはお母様の事をよく知っているのですよね？」

「あぁ…ベルは生きているよ。大丈夫だ、俺ベルに頼まれてお前の
所に来たのだから」
その言葉と裏腹に何故か少し悲しげな顔をしてレンは微笑む
しかしその顔をリンは見逃していた、その顔の意味に気づくことも
なく…

「そうですかお母様に逢われたのですね？今はどちらに住んでらっ
しゃるのですか？」
「あぁそのうち話すよ。それより今はとにかくこの町を出てウェン
ゼルナに向かわないと…な？」

ポンポンとリンの肩を叩きながらレンはニッコリと笑う。
リンを叩いた手が少し汗ばみ顔にも汗が浮き出している
それもそのはず…いくら皇帝竜でも今は大切な角がなくなった状態
である。

しかも苦手な教会（聖域）なのだ、長い事いると気分も悪くなり冷や汗もでる。

「……」

リンは少し顔を下に向けて黙り込んだ。

「どうした？」

「…あの、神父様が…私がいなくなると年をとった神父様がお一人になってしまうの」

「私の事は大丈夫じゃ、行っておいで…」

ガチャ…キイィ

そう言いながら入って来たのは白髪の老紳士。

口のまわりと顎に髭を生やしていてやしていて年齢は７０歳くらいだろうか？その割には背筋がピンとしている。

「神父様お帰りなさいませ…」

「すまぬ、盗み聞きするつもりはなかったのだが二人の会話が聞こえてきてな？」

「私の事はよいからお行きなさい」

「でも…」

リンは今までお世話になった神父を置いて旅に出るのが心もとなかった。

「いいのだ、リンよ？私はお前の両親に昔言われておるのだ…もし自分達が戻らなく数年たってからリンを迎えに来た不思議な若者がいたら一緒に行かせておくれと…」

「神父様がお父様とお母様に？」

「あぁ、だから行っておいで？これもお前の運命だろう」

「そこの若者よ」

「オレ？」
レンは自分の顔に指をさす

「どうかリンをお願いします」
そう一言レンに言うと老神父は深々と頭を下げた

「あっ？あぁ、まかせな」
バンっと胸を片手で拳を作で自分の胸を叩いて見せた

「ありがとうございます神父様、必ず父と兄を連れて帰ってきます。
」
リンは神父の胸に頬をあて嬉しそうに微笑み涙を流した。

3話（うそはダメです）

「なぁ、おい」
「はい？レンさん」
「ビッシュに向かう道はこっちでいいんだよな？」
「えっ？あの…えっと…ここ道の上を歩いているように見えないのですが？」

二人は町を出た後、港町イーヴルに向かう事にした。
そこまで行くにはビッシュ、アムデコ（村）、ナワイ（町）、ケートキ（村）、ロムロ（村）、ガント（村）を経由して行く事になるのだが、途中すれ違った旅の商人がビッシュに向かうには街道の途中に細い分かれ道があるからそこを行った方が近道だと聞き、言われたとおり歩いていたはずなのだが、二人が進むに連れて段々と周りはうっそうとした雑草と木が生い茂った獣道に変わっていた。

ガサガサ・・・・青々と茂った自分たちの背ほどある草むらを手で掻き分けながら二人は歩く
「確かビッシュまで近道で歩いて5～6時間で着くはずと仰っていたのですが…」
「あぁ、あのおっさんそんな事言っていたな？」

「しかし、誰かさんが角をちょん切ってくれたせいで方向音痴になるわ…元の姿になって飛ぶことも出来ないわぁ」
「元の姿に戻れないのですか？」
リンは申し訳なさそうにレンの顔を見る

「ん？あぁなれない事は無いが…」
「？」

「力のコントロールが出来ない。俺が元の姿に戻ったりしたら一瞬にしてここら辺り…イヤこの大陸が炎に包まれ灰になるだろうな」
「一瞬ですか？」
「あぁ、あんたなんかあっという間に灰になってしまうぞ？」
「そっ、それじゃあ私の住んでいた町の人達も？」
「そうだな…あの村の連中も燃えちゃうだろうな」
見る見る不安な顔になっていくリン

「神父様も？」
「神父様も！」

「…」
「だっ、ダメです！！お願いします元の姿に戻らないで下さい！！」
リンは今にも泣きそうな顔をしてレンの腕に必死にしがみ付く
「いや、だからならないって」
レンはポリポリと顔を指でかきながら頬が赤くなる、どうやらしがみ付いた腕にリンの柔らかい胸が当たっているらしい。

（…結構胸あるんだな／／／）

「おいおい、よくこんなところでいちゃついていられるな」
茂みの中から声がした、すると三人の男が二人の前に姿を現した。
皮の胸当てをつけ、手には棍棒を持ちどこからどう見てもガラが悪そうで人相もいいとは言えないヒゲ面の大男達だ

「ヒヒヒ…女がいるぞ？！女が」
一人の男が口に指を咥えながらリンの方を見る

「レンさんこの人達どなたでしょう？」

リンはレンに問いかける
「なんだ？お前ら」
レンは怪訝そうに男達を睨む
「女はいいが男の方はどうする？」
「まだガキみたいだな？子供だから筋は少ないんじゃないか？ヒヒヒ…」
三人の男はレン達の前に立ちふさがった。
「…お前達バジリスクか？」
レンはリンを庇う様に前に出て男達を睨み付けた。
「ハッ、ハハよく分かったなぁ小僧」
「そうさぁ俺達はバジリスク様だ！」
「分かるも何もお前らからするいや～な臭い、そしてその三本の指どう見ても分かるだろ？普通」
「悪いけど俺達先を急ぐから退いてくれない？お前らの相手をしていられないんだよ？」
「さぁ、行くぞ」
と言うとリンの腕を掴み男達の横を行こうとする
「ふざけるな！小僧！？」
「お前達は俺様達の食事なんだぞ？逃がす訳ないだろうが？」
男達の一人がレンの襟元を掴もうとした
ガッシュ！！
するとレンはリンの腕を掴んでいる方とは逆の手で男を殴り倒した。
ドサッ！

男が大きく宙に円を描いて地面に落ちる
「お前ら誰に対してそんな口利いているんだ？」
俯きながらレンは低い声で言う
「なっ！このガキ！？」
「かまわねぇ！！このガキから殺して食うぞ！？」
一人の男が大きく口を開けた…するとみるみる首の辺りまで口が裂けて行く
（正体現したか…）
グルルルル…
目の前にいた男達は二足立ちの全身鱗のような硬い皮膚に覆われた2メートル半はあるだろうか巨大なトカゲに姿を変えていた。
「きゃっ！！レンさんこの人達！？」
目の前にいた男達が不気味なオオトカゲに変貌するのを初めて見た為かリンは顔が青くなりガタガタと振るえだした。
「おいおい、その不気味な姿をこの女の子が怖がっているぞ？」
馬鹿にしたようにレンは鼻でフッと笑った。
（レンさん怖くないのでしょうか…）
リンはレンの背中に隠れながらソロッとバジリスク達を見る。
（やっぱり…怖いです…）
「ガハハ、どうせすぐ俺達の腹の中に入るんだから少しぐらい我慢しろ」
一匹のバジリスクがそう言うと口からレン達に向けて何かを吐いた。

紫色の霧だ

（しまった！！毒！？）

レンはとっさにリンを押倒しその上に覆いかぶさった。

「ほえっ！？レンさん？」

いきなりのレンの行動にリンはびっくりした。

レンの体重がリンの背中に重くのしかかる。

レンにとってバシリスクの毒はなんでもないが人間のリンには猛毒なのだ。

『今から３０秒程息を止めていろ！！』

レンはリンの耳元で囁く

それに答えるとリンはコクンと頷き息を止めた。

それを確かめるとレンは霧の中を立ち上がり、ハァーっと息を吐き出し今度は大きく息を吸って毒の霧を吸い込み始めたのだ。

見る見る霧はレンの口の中に入って消えていった。

「なっ、何？馬鹿な！！」

その行動に驚いたのはバジリスク達だ。

「こいつ俺の毒の霧を吸い込みやがった？」

レンは吸い込んだ口を腕で擦りながらニヤっと笑った。

「貴様、人間じゃないな？！」

一匹のバジリスクが三本の真ん中の指でレンを指す。

「ばーか、今頃気がついたのかよ？大体人間がお前らを見て怖がらないはずないだろ？まぁ例外はいるかもしれないが…」

ふとある人物を思い出し、何故か自分がゾッと身震いをした。
「と、とにかく俺はお前らの天敵：ドラゴンだ！！」

「ドラゴンだと？貴様みたいなガキがか？」
「大体ドラゴンがこんな所にいるはずなかろうが？しかも貴様指が5本あるじゃないか？」

レンは両手を腰に当て偉そうに踏ん反り返った
「フッ…あのなぁ、ドラゴンはドラゴンでも5本指のドラゴンといやぁ…解らないか？その爬虫類の頭じゃ」

「まさか！！エンペラードラゴン？」

「大当たりw」
レンはニカッと笑い両腕を胸の前で組んでふんぞり返る。
その言葉でバジリスク達の顔が青く変わる、いやもともと青白いのだが：

「お前らなんて俺が元の姿に戻ればあっという間に丸呑みだぜ？」
ニィィッとレンはバジリスク達を見ながら舌で口元を舐める

「ヒッ」
「やばいぞ！逃げよう」
「人間の女を置いてか？」
「バカ！！女を食ったとしても俺達がこいつに喰われたらしょうがないだろ！！」
アタフタとバジリスク達がうろたえ始めた。

「でっ、どうするんだよ？なんならさぁ、味みてあげようか？」

「ヒィィィィ　逃げるぞ！！」
三匹は慌てながら草むらの中へと消えていった。
「やれやれ、お前らなんか誰が喰うかよ？オレは舌が肥えているんだ」
そう言うとレンは中指を立ててバジリスク達が去っていった方へ向けた。
ポカーンと口を開けてリンが座り込んだままレンを見上げている
ンンッ？とレンはその視線に気づきリンに手を差し出す。
「大丈夫か？」
差し出された手にリンは我に返る
「あっはい、レンさんってすごいのですね？」
リンはレンの手をとって立ち上がる。
「ハハ…それ程でもないけどな？」
レンは照れながら頬を赤らめる。
「ありがとうございます」
ペコリとリンは頭を下げた。
「でも…嘘はいけませんよ？」
「はい？」
頭を下げた後リンはレンの顔に自分の顔を近づける
「さっき…元の姿に戻ってと言ったじゃないですか？」
「いや、あれはしょうがないだろ？あの場合は…そうしないとお前…」
「うそはダメです！！いいですね？」

リンはレンの手をギュッと握り締めた

「はっはい；；」

その後レンとリンは予定よりも一時間程遅れてビッシュに着いた。
どうやら道は間違ってはいなかったらしいバジリスク達が去った後
よく探すと横に細いながらも道がある事に気がついた。
どうやらバジリスク達が人間を迷わせる様に術が施してあったのだ。

4話（家族みたいに）

ビッシュについた時はもうとっぷりと日が沈んでいた。
仕方ないので宿を探し（自分は野宿でもかまわないのだが、リンはそう言う訳にはいかないらしい）一晩泊まる事にした。

「はい、二階に上がって右の奥の部屋だよ」
チャラ…宿の女将が部屋の鍵をレンに渡す。
「あのぉ・私の部屋はどちらですか？」
リンはおずおずと声をかける

「なに言っているんだい？あんたら恋人なんだろ？だったら部屋は一緒さ」
「…はい？」
そう答えたのはリンじゃなくレンだった。リンは女将が言った言葉にきょとんとしていた。
「おい、おばさん・・・俺達どう見たらそう見えるんだよ？」
「じゃあ、姉弟かい？」
「ちゃうわ！？」
レンはカウンターをバンバンと叩く…どうやらレンの方が弟扱いなのが気に入らないらしい
「どっちにしても今時分に来たんだ、そんなに部屋が空いてる訳なかろう？さぁ、行った行った！」
どうやら女将はレンがカウンターを叩いたのが気に入らなかったらしい、そのまま奥の部屋に行ってしまった。

「コラァババァ！！逃げるなっっ！」
カウンターに乗り出そうとするレン

「レ、レンさん…」
リンはレンを必死に押さえ、他の泊まっている客に迷惑だからと引っ張って部屋へと連れて行った。

ドサッ！！
勢いよくベッドにダイビングしたのはレンだ。
「う～…ババア…朝になったら覚えていろよ？」
ブツブツ言うレンを後ろにリンは羽織っていたケープをハンガーにかける
「ごめんなさい・・・なんだか私のせいでレンさんに迷惑をかけて…；；」
「はっ？なんでお前が謝るんだ？」
「えっと…私と一緒にいたから…そのぉ恋人とか師弟に間違われて；；」
「別にお前のせいじゃないだろ？」
むっくりとベッドから起き上がりレンは座りなおした。
「でも、それじゃあ…なんで怒っているのですか？」
「…なんでだ？」
はたと気づき、なんで怒っているのかレンは首をかしげ考える・・・
しかし自分でもさっぱり分からなかった。

「あの…レンさん」
「なんだ？」
「その…」
「ん？」

「すみません…着替えますので…部屋の外に出てもらってもいいですか？」
リンはベッドの上に置いてあったパジャマを持ち恥ずかしそうにニッコリ微笑んだ。

コッチコッチコッチ
宿は静まり返り、部屋の中は壁に掛けてある時計の音だけが聞こえていた

（…眠れねえ；；）
あれから2時間くらいたっただろうか？レンはベッドから起き上がり頭をかきながら窓の外を見ていた。
月明かりが隣のベッドで眠っているリンを優しく照らしている。

「なんか…人間の匂いが染み付いたベッドって寝心地悪いんだよな…しかもこう…匂いが充満していて感覚鈍るし」
ふと見るとリンのベッドの横にあるサイドテーブルの上に水が入ったポットとカップが置かれている事が月明りで確認できた。

「水でも飲むか…」
ベッドから立ち上がった時、廊下の奥から何か音が聞こえた。
「？」
「なんだ？」
ズル：ズル…ズルズル

気のせいかその音はレン達の部屋へ近づいてくるみたいだ
「…一応確認しておくか」
ガチャ
ドアを開けレンは廊下を覗いてみたが真っ暗な闇が奥に続いているだけで何も見えない
「気のせいかな？…まぁ…いいか」
そう思いドアを閉める…
（この時ドアの間にいるモノに気づく事もなく）
そしてリンのベッドの横に行き手をポットにかけようとした

キィィ…ドアが薄く開き何かがジッと部屋の中を覗き込む

「！？」

（やっぱり何かいる！？）

ダダダッ・・・

ポットにかけようとした手を構えレンはクルッと向きを変えドアに向かって走り出した。

「誰だ！？」

バンッ！

ドアを開け扉の向こうにいるだろう者に向かってレンの手刀が振り落とされようとしていた・・・

うぎゃあぁぁぁ……

叫びは一斉に宿に響き渡った

ポツポツと所々で宿の灯りがつき始める

宿泊している客が今の悲鳴で起き始めたのだ。

その悲鳴を上げたのは事もあろうかレンであった。しかもレンはビックリして腰を床に落としていた。

「ん…どうしました？レンさん」

リンは目をこすりながら起き上がった。レンの悲鳴に起きたのではなく宿の騒がしさにどうやら起こされたらしい

ドスドスドス

「ちょっとお客さん、こんな時間に何騒いで…って；；あ、あら？お母さん」
宿の女将が慌てて2階へとやってきたのだが、レン達の部屋の前にいる物を見て“お母さん”と呼んだ。
よく見るとその物体は白い花のレースをあしらったネグリジェを着た背の低い老婆だった。その老婆が廊下に這い蹲っていたのだ。

「な…なんだ…コレ？！これって人間か？」
レンは目の前にあるシワだらけの老婆に向かって指を指した。
ふよふよとリンはレンの側まで近づき覗き込む
確かにレンの前には見た目は軟体動物？よくてカメ？の様にベッタリと廊下に這い蹲っているシワだらけのお婆さんがいた。
いかにエンペラードラゴンとてこの不気味な物体…いや老婆には驚いた様だ。

「おだまり！！レディに向かってこれとはなんだい？」
老婆はレンの指をはらうとその場にちょこんと座り込んだ。

「まぁまぁ、お母さんったらこんな時間に何をしているんですか？」
宿の女将は老婆の側にパタパタと歩いてきた。
「何を？って、あんたがここの部屋の客はぜぇーったい駆落ちだぁなんて言うから確かめに来たんだよ？」
老婆は女将の方をちらっと見るとニパッと笑う
「おっお母さん；；」

「ちょーっとまてよ？こらぁ…誰と誰が駆落ちなんだよ？」
目の前にいる老婆と女将にレンは怒鳴る
「違うのかい？」
シワだらけの顔がレンの顔を覗き込む
「当たり前だ！！」

レンの顔が少し赤くなる
老婆はちらっとリンの方も見る…するとリンも顔を赤くして首を縦に振る

「ほう…違うのかい？」
老婆は、“なんだつまらない”みたいな顔をしてため息を少しつく
「わかったか？」

「・・・しかしあんた今そのお嬢さんに・・・手出そうとしていたじゃないか？」
「はぁ！？」
「えっ？」
老婆はビシッと指でレンを指す
驚くようにリンはレンの方を見る、そして思わすレンから一歩下がった。
「違う・・ちっがーう！！オレは水を飲もうとしてだな！？ポットがリンのベッドの横に置いてあったからぁ」
あたふたとレンはリンと周りに説明し始めた。
「おやおや？その割には顔が赤いねえ」
老婆は両手を後ろで組んで真っ赤になったレンの顔を覗き込んだ
「ぜぇーったいに違う！！違うぞ？リン、信じてくれ」
リンに同意を求めるレン
「えっ？でも…」
リンはレンの目を合わせようとしない…自分でもどちらを信じていいのかわからない

「なんでもあの子の事襲おうとしたらしいぜ？」
「違うわよ？根性がなくてできなかったんだとさ」
「え？邪魔が入って出来なかったんじゃないの？」

他の客達の勝手な想像にレンは言葉が出ずワナワナと体を震え上がらしていた。

「やれやれ、邪魔して悪かったねぇ？あたしゃ消えるから仲良くおやり？」

ヤバイ…と思い一言そう言うと老婆は立ち上がりレン達の前からそぉーっと去ろうとした

「ちゃう！こらよく聞けっ！！」

「オレはベルが好きなんだー！！」

その声はその夜、宿全体：いやご近所にまで響き渡った

ピーチチチ…ピピピ…

空気がひんやりと気持ちがいい

小鳥達が楽しそうに歌い始める朝だ

宿にある食堂

テーブルの上には半熟の目玉焼きとパン、スープ、コーヒーが並べられてある。

美味しそうな朝食…なのに二人は難しい顔をして食べていた。

「なんでも他に好きな女がいるらしいぞ？」

「かわいそうにあの子遊ばれたのね…」

夜が明けても尚も続く泊まり客の噂話…この様子だと尾びれ背びれがついているだろう…しかし当の本人（レン）はもう怒って怒鳴る気にも

なれない

「ったく…これだから人間は」

「レンさん…」

テーブルに膝をつきレンは溜息をふうっとつく

「おやおや、若いもんが朝から溜息かい？」

横目で見るとこの騒動の元になった宿屋の老婆が昨晩のパジャマといい、今朝はヒラヒラのレースをあしらったエプロンドレスを着てポットを片手に立っていた。

「お嬢さんコーヒーのおかわりはどうだい？」

ニッコリと老婆は微笑む、顔がクシャッとなりどこに目があるかわからないくらいだ。

「あ、いただきます。ありがとうございます、おばあちゃん」

「おばあちゃんなんて呼ばないでくれ？これでもエリザベッタと言う名前があるんだから」

「あっはい、エリザベッタさん」

コポコポと温かいコーヒーがカップに注がれる

「すまないねえ、そっちのボウズはともかく…お嬢さんに迷惑をかけて」

「いえ、私は大丈夫です」

あははとリンは複雑な心境で微笑む

「妖怪の名前はエリザベッタか…似合わねえ…」

ゴン！！

「～ってぇ；；」

エリザベッタは思いっきりレンの頭を拳で叩いた。
「なにをする、このババア！」
チラッとエリザベッタはレンを見てフンッと鼻息をつく

「あの、エリザベッタさん」
何か話題を変えようとリンはエリザベッタに話しかける。
「その服とても素敵ですね？可愛らしいです」
「おぉ！！そうかい？似合っているかい？」
「えっ？」
可愛いとは言ったが似合っているとは口に出していない・・・・
「この服はねぇ、さる有名デザイナーが作った服なんだよ？」
ウキウキとエリザベッタは頬を赤らめエプロンドレスの裾を持ち上げひらひらさせた。
「デザイナーさんですか？」
「そう、インヂェンさんと言って今イーヴルで人気でね？ワザワザ行って作ってもらったのさ」

「ゼンゼン似合わねぇ…」
ドカッ！！
二度目は空になったティーポットで頭を叩かれた

「そのインヂェンさんね？とてもシャイでなぁ、そうそう年齢はあんたより少し年上っぽい感じだの」
「そうなんですか？私と余り年がかわらないのにデザイナーさんなんてすごいですね？」
「そーじゃろ、そーじゃろ？」
私達もイーヴル行きますから、ぜひ会ってみたいですわ」
「ホホホ、お嬢さんも行って作ってもらうといいよ？お嬢さんならまだ製作対象年齢だろうし、まぁ値は少々いくがのう」

「??対象年齢?」
「そうじゃよ?インヂェンさんは子供服専門のデザイナーだからのお」
「は…はぁ?」

(…って;;てめぇが着ているのは子供服なんか?!)
と思わずつっこみたかったがレンはあえてやめた
リンも自分はそんなに子供っぽく見えるのかと思い少し悲しかった。
朝食をすませ二人は次の村アムデコを通り過ぎナワイへ向かう。
前回の経験を踏まえ時間はかかるが街道を行くことにした。

「そう言えば…レンさん」
「んー?」
「私のお母さんが好きなのですか?」

ブーッ!!
それはアムデコを通り過ぎナワイへ向かう途中、道の横にあった木の下にて昨晩は迷惑をかけたと朝エリザベッタがお昼に食べなさいと貰ったサンドイッチを食べている時だった。
「なっ、何をイキナリ言うんだ///」
レンは耳まで真っ赤になっており、服には食べはじめたばかりで噴出したサンドイッチがベッタリとついていた。

「ごっ…ごめんなさい!!聞いたらいけませんでしたか?」
「はぁ?!」
「だって…レンさん昨晩…ベルが好きなんだって…そう叫んでましたから…」

リンは服をハンカチで拭いてあげながら下から覗く感じでチラッとレンを見る。

「ベルって…私のお母さん事ですよね？」

そう言われて昨晩の事をレンは思い出す、誰にも言った事もない言葉…本人（ベル）にさえ伝えたことがない言葉を昨晩は気が動転して大声で叫んでしまったのだ。

「いやぁ…えーっと；；；」

空を見上げた後ポリポリと顔をかきリンの方をチラッと見る。

服の汚れを拭き終わったリンは下を向いて足元に咲いている小さな花をジッと見ていた。

なんとも言えない沈黙が二人の間に続く

すると2羽の小鳥が飛んで来て下に落ちたサンドイッチの欠片を食べ始めた。

1羽は体がもう1羽よりも小さく、大きい方は小さい鳥が食べているのを優しく見守っている、どうやら親子のようだ。

その様子を見ていた後レンは遠い記憶を思い出す様に目を閉じてもたれている木を見上げた。

「ベルは、強くて…綺麗で…そして聡明で……」

「えっ？」

リンが振り向くとそこにはさっきまで照れ笑いしていた人物とは思えない別の顔、真剣な顔をしたレンがそこにいた。

オカアサンハ…ドコ？

薄暗い洞窟、天上のあちこちの穴から僅かな光が漏れる。
洞窟の割には気温が高い・・・たまに奥の方から熱風が吹いてくる。
そんな場所に藁が敷き詰められておりその上で一匹のドラゴンが卵から孵った。
小さなドラゴンの子供はまだ見えにくい目を凝らし、匂いをかぎ、気配を探りながら自分を産んだ母親を一生懸命探す。

ドコ？ドコニイルノ？

まだうまく歩けない…前足と後足を動かし這いながら熱風が吹いてくる方へと進む。
やがて奥に進むにつれて強烈な熱気とボコボコと音が聞こえてくる

ソコニイルノ？

待ち望んでいた母親に会えると思い子竜のスピードが早くなる
どんどん目的に近づくにつれて洞窟内が明るくなっていく

イマソコニイクヨ…オカアサン

イマイクカラ…

ギュットダキシメテ…

自分を産んでくれた母親が奥にいると思い必死になって這って来た・

・・抱きしめてもらう為に
しかし生まれて間もない小さなドラゴンの目が見た光景・・・そこには

ボコボコと音を立て湧き出しているマグマ溜まり、その中央にある島の上にある爛れた物体…殆どの肉が腐って崩れかけてはいるが骨の形、そして匂いで子竜にはそれが何かがわかった。

お母さん？

子竜は母親だったらしいその物体の前で過ごした。
お腹が空いたので自分を包んでいた殻を食べた…生まれた後は自分の匂いを消す為と栄養があるから食べろと本能が教えてくれたからだ。
しかし、その殻も食べ尽きてしまい子竜もどうしたらいいか分からず丸くなってジッとしていた。
それから3～4日たっただろう…動く力さえ残っておらずもう自ら死を選ぼうと子竜は思った。
目を閉じて舌をかみ息絶えようとした時だ…何かがフワっと子竜の体を包み込んだ。

「やっとみつけた・・お前は私が望んで生まれて来たのだから死なせるわけにはいかない」

「そう言ってその人物は俺を優しく抱きかかえ・・・あの洞窟から自分の住む場所に連れて帰り育ててくれた」

「それじゃぁ…その人物は」

「そう…それが…その人物がお前の母親のベルだ」
レンはリンの方を向きニカッと笑う
「だから俺にとって、ベルは母であり、姉であり、尊敬する人物であり・・・・何より」

「一番大切な人なんだ…」
その言葉を言った時のレンの顔が少年っぽい笑顔から少し大人びた顔をした事をリンは見逃さなかった

「??どうした?」
「えっ?」
「なんかお前少し顔が赤いぞ?」
レンにそう言われてリンはパッと両手を頬にあてる

「なんでもないです!」
(どっどうしてでしょう?…今何だかチクッとしました;;)

幼い時、母親は大切な仕事があるからと父親から聞き殆ど会った事がなかった・・・しかも5歳くらいまでの記憶しかない。
それなのに…レンは母・ベルとは一緒に暮らしていたのだと初めてリンは知ったのだ。

(きっと…私の知らないお母さんの事をレンさんが知っているので嫉妬したのですわ・・・きっとそうです・・・;;)
なんて心が狭い人間なんだろうとリンは自分を恥じた

「あ…」
リンは何かを思いついたのか軽くポンと手を叩く

「？なんだ？」
「そうですわ？私はお母様の娘ですもの！！」
「？？」
スクッとリンは立ち上がり両手を胸の前に掲げ目をキラキラさせた。

「レンさん！！」
「なっ、なんだよ？」
いきなりのリンの行動にレンはビクッとした
（また変な事思いついたんじゃあ・・）

「私とレンさんは、家族なんですわ！！」

「はぁ、はい？？」
レンはリンの言葉に目が点になる
「だって私はお母様の娘、レンさんはお母様に育てられたのですもの！！血は繋がらなくても家族になれるはずですわ？」

「ちょっとまて！！」
（血はともかく・・・種族も違う～）
思わずレンは一人勝手に暴走するリンに手をかざしストップさせようとした。

「私達仲良くしましょうね？本当の家族みたいに♪」
止めようとした手はリンの両手に包まれる
無邪気に微笑むリンに思わず吊られてレンは

「うん」
ペコリと頭を下に振る
オレって…本当に最強のドラゴンか？と後から自分に突っ込んだことは言うまでもない

（そうだ…今度レンさんに弟か兄のどちらがいいか聞かないと）

新しい家族が出来たと喜ぶウキウキなリンがそこにいた。

5話－1（嘘じゃないですもの）

「ツゥゥ……」
「レンさん大丈夫ですか？」
ナワイを通りケートキに着いた。
小さな村の食堂にてレンとリンは休憩をとっていた。
旅をすると言う事は自分の足で歩くという事だが…こともあろうか自分の足でこんなに長いこと歩いたことのないレンは今頃になって疲れと筋肉痛が襲ってきたのだ

「だっ…大丈夫だ」
「レンさん！！顔が真っ青です」

仕方がないだろう今までこんな長い距離を歩いたこともなく、ましてやリンの住んでいる町さえ近くの森まで空を飛んで来たのだから…まさか自分が二足歩行で長く歩いて旅をすることは前のレンには考えもしなかった事だ。

「君、大丈夫かい？」
リンがテーブルの横を見るとは１８～２０歳くらい、肩にはリュックをかけている。グレーのマントを羽織った白銀の髪の青年が心配そうな顔でレンを見ていた。

「あぁ、これは足が腫れているね？」
青年はそっとレンの脹脛をそっと触る
「あの…貴方は？」
「あぁ、ゴメン怪しい者じゃないよ？痛そうにしているので…つい声をかけてしまった。ビックリさせてしまったみたいだね？」
「いえ、大丈夫です」

「いや…君じゃなくて…彼の方が」
そう青年に言われてリンが見るとレンは青年の方をまるで動物が警戒し唸るように睨んでいた。

「レンさん？」
「なんか…野生動物みたいだね？君の連れは」
青年は軽くため息をついた後、持っていたリュックを下におろし、しゃがみ込んで何やらガサガサ探し始め、中から一枚の大きな葉を取り出した。そして今度はその葉に水をかけ葉をもみ始める。
「さて、ちょっと失礼するよ？」
そう言うと青年はレンのズボンをめくり手で揉んでいた葉を脹脛にあてる…するとヒヤっと冷たい感覚がレンの足に伝わってくると同時に何やら刺激の強い香りが鼻をついた。

「なっ？くせぇ…」
「何やらすごい匂いですね」
思わず二人は自分達の鼻を抓まずにはいられなかった。
「あ…やっぱりきつかったかな？でもこれよく効く薬草なんだよ」
青年はレンの足を摩りながら微笑んだ

「すみませんが…お客さん、この匂い他のお客の迷惑になるんだけど」
匂いを嗅ぎつけてか置くから店員らしい男性が出てきた、よく見ると他のお客達は皆鼻を摘んでこちらを見ていた。

「あはは…すみません営業妨害ですね？」
青年は立ち上がり店員の方を向いて頭をかき照れながら笑う。
「そう言う事で、君達ここにいたら不味いみたいだから移動しよう、移動！」
青年はポンポンと二人の肩を両手でたたいた後、クイッと親指を入

り口のドアに向けた。
「はぁ？何勝手なことを言っているんだよ？お前？」
「レンさん、親切に手当てをしてくれた方に失礼ですよ？そんな風に睨んでは駄目です」
「リン…手当ってたかが筋肉痛で葉っぱ貼っただけだぞ？」
「それでも手当ては手当てです」
「はぁ…そうかよ？」

「じゃあ、話はまとまった事だし、外に出よう」
青年はリュックを背負い扉へと向かう
「そうだ、まだ自己紹介をしていなかったね？」
外へと向かう足を止めて青年は振り返り微笑む
「僕の名前はトホシロと言うんだ宜しく」

食堂をでて3人は少し離れた井戸場へとやってきた。周りには小さい桶が数個おいてある。少し離れたところには2人かけのベンチが横に二つ並んでいた。
「さっき村を探索している時に見つけたんだ、ご丁寧にベンチもあるし・・たぶん村の女性たちがお喋りする場所なんだろうね」

カラカラ……バシャン
トホシロは井戸の水を汲み上げ始めた
「トホシロさんはこの村の方じゃないんですか？」
「おい、リンどう見てもこいつの格好は村人って格好じゃないぞ？」
「あ、そうですね」

「ははは、これでも僕は医者なんだよ？あっ、レン君そこのベンチに座って」

言われる通りレンはベンチに座る
「お医者様なのですか？すごいです」
井戸から汲み上げた水をトホシロはそばにあった桶に移し変えた

「すごくなんかないよ、まだまだ未熟だし…」
「よいしょっと」

コト・・
トホシロは桶に入れた水をレンが座っているベンチまで運んで下ろした
「レン君、もう一度足見せてくれるかい？」
「あ？あぁ」
レンはトホシロに言われたとおり靴を脱いでズボンの裾を捲り両足を見せる
「失礼」
チャプチャプ
トホシロはさき程レンに貼った薬草を取り、汲んで来た水をかけレンの両足を洗いながら脹脛と膝をさする。
「関節の方は大丈夫みたいだな・・・しかし君は何処かのお坊ちゃまかい？」
「なんでだよ？」
「普通ただの筋肉痛でここまで腫れる人は始めて見たよ？よほど普段歩いてないんじゃないかっと思って」
「ぐっ…」
まさか自分はドラゴンで普段は四足で、移動する時は空を飛んでなんて言える訳がない
「ま…まぁな、普段歩かなくてもいい環境で育ったからな」
「やっぱり」
「そうなんですか？レンさんってお坊ちゃま？」
リンも知らなかったですという顔をする

（リンお前なぁ）

「新しい薬草に変えておいたから、明日の朝までとったら駄目ですよ？」

「朝までって…明日の朝までこの匂いとお付き合いするのか？俺は」

「まぁ、そういう事になりますね？」

ニコニコと微笑みながらトホシロはリュックから出したタオルで手を拭く

「さて、先を急ごうか？リン」

レンはベンチから立ち上がり歩こうとするがまだ痛みが来るのかうまく進まない

「うっ…」

「ダメですよ？レン君、今日はもうあまり歩かないほうがいいですよ？」

「レンさん…お医者さんの言うとおりです」

「しかしなぁリン？俺たちは先を急いでいるんだぞ？それにこんな小さな村に泊まるとこなんて…」

「ありますよ？泊まるとこなら」

「本当ですか？」

「えぇ、僕はこの村の教会に泊めてもらっているので宜しければ今夜一晩なら泊めて頂けるようお願いしてみますよ」

「げっ…教会？また教会？！」

「教会ですか？ぜひお願いします」

教会と聞いて嫌がるレンに対しリンはとても嬉しそうだ。

二人はトホシロの頼みで村の小さな教会だが泊めてもらえる事になった。

「ベッドが二つしかないからね、レン君とリンさんが二人で使うと

いいよ」
「あのトホシロさんは？」
「僕は大丈夫、教会の長椅子に横になるから」
「そんな…私が長椅子で…」
「大丈夫、こう言う事はしょっちゅうさ？旅を長いこと続けているとね」
「じゃあ、遠慮なく俺は寝かせてもらうから」
そう言うとレンは二人を置いてさっさとベッドへと潜りこんだ
（…早いとこ寝ないと身が持たないぞ）

「じゃあ、僕は講堂にいるから」
「あ…トホシロさん」
トホシロは二人がいる部屋から出て行った

ベッドから起き上がったのはリンだった、隣ではレンが布団に丸まって眠っている…が、先程から「うぅ」やら「あぐ」と口走っている。
「…レンさん何の夢を見てらっしゃるのでしょう？こんなに魘されて…それにしてもなんだか眠れないです…トホシロさん寝むれているでしょうか？」
自分達がトホシロの寝る場所を取ってしまったと言う罪悪感でリンは眠れなかったのだ
「少し様子見てきましょう…」
リンは部屋を離れ教会の講堂へと向かうことにした

数本の蝋燭が明るい火を灯しユラユラ揺れている、中央には女神像立ちその下に膝をついて手を組みお祈りをしているトホシロの姿があった。
祈りの最中のトホシロに気を使ってそっと近寄ろうとしたリンだったが、気配に気がついたのかトホシロは後ろを振り返った

「どうしたんだい？眠れないのかい？」
「あっいえ、まだ起きてらしたのですね？」
「うん、ちょっと考え事していてね？でももう寝ようかと思っていたところさ」
「考え事ですか？」
「そう、もうそろそろ僕もこの村を出ようかと思ってね」
「トホシロさんも旅をしてらっしゃるのでしたね？そういえば」
蝋燭の炎が揺れ女神像を照らすその姿をトホシロは優しく見上げる
「ある人の為に探し物…薬を探して僕は旅をしているんだ」
「薬ですか？」
「だけど中々見つからなくて…旅に出てもう5年になるかな？そろそろ帰ろうかと思っていたところだよ」
「どんな薬なのですか？」
「君に話してもわからないかも知れないけど…」
「言ってください？もしかして何か役にたつかも！」
トホシロはチラッとリンを見た後また女神像を見上げそのまま目を閉じた、誰かを思い出しているかのように…そして再びリンの方を向いて真剣な顔をして口を開いた。
「ドラゴンの…エンペラードラゴンって聞いたことあるかい？」
「えっ？」
思わぬ言葉にリンはビックリした。
「ドラゴンの中で最強と言われる伝説のドラゴンらしいんだけど…僕も実際見たことないからね？よくわからないのだけど」
「その…ドラゴンがどうかしたのですか？」
「うん、そのエンペラードラゴンの角…角と言っても神角という力

の源になるところだけど、そこが妙薬になるらしいんだ」
「角が妙薬ですか？」
「そう、ある人がその病気にかかってしまって…それで僕はその病気を治すためにエンペラードラゴンを探す旅に出たってわけさ」
「そうですか…ところでどんな病気なのですか？その方大丈夫なのですか？トホシロさん5年もお会いしてないのでしょう？」
「うん、手紙を出して確認はしているから大丈夫だと…難しい病気で内容もその人の名誉の為に話せないんだ…ごめん」
「あ、いえ…こちらこそごめんなさい」
「ううん、いいんだよ…」
「しかしエンペラードラゴンなんて本当はいないのかもな…ドラゴンでさえ見なくなったと言うし…」
「…あ…あの」
「ん？どうしたんだい？」

「うっ！！いやだぁヤメテクレぇぇぇ」

ドサ…

「うぁ？」
「何だ…夢か？」
（まったく教会なんかで寝るから嫌な夢をみたぜ…おまけにベッドから落ちるし…）
ギシ…レンはベッドに手をついて起き上がる

「ヨイショッと…おっ？足の痛みがない」
「おい、リン起きろよ？足の痛みがなくなっているこれなら朝一番で出発…ってあれ？」

レンはリンのベッドをのぞき込むがそこに寝ているはずのリンの姿がない事に気がついた

「なんだ？トイレか？」

5話－2（嘘じゃないですもの）

レンはベッドの上で胡坐と腕を組んでリンのベッドに戻ってくるのを待っていたが暫くしてもリンは戻ってくる様子がなかった

「おかしいな…トイレじゃないのか？」

「…あいつの事だからもしかして迷子か？いや・・・こんな小さな教会でそんなことないだろう・・・・あはは」

「……」

「……」

（なんだか…ありえそうだから探しに行ってみるか）

レンは痛みが引いたばかりの足でリンを探す為に部屋から出て行った暫く歩くと廊下の奥の扉から灯りが漏れているのを見つけそのドアをそっと覗き込んだ

「げっ…ここ講堂か？どうも嫌な空気を感じるはずだ」

そこはレンがもっとも苦手とする教会の聖なる場所、講堂だった。しかしその講堂の中央の長椅子に誰か人影がいる事に気づく。

「誰だ？教会の力でうまく目が見えない…」

レンは目をゴシゴシと擦りもう一度長椅子の人物をみた…するとそこには先ほどから探していたリンがいるではないか

「あの馬鹿…こんなところにいたのか？どうりで気配と匂いが分からないはずだ…」

（って…隣にいるのはあの医者か？まぁいいか、人間の臭いがしない変な奴だが足も良くなったし丁度いいから礼でも言っておくか）

「おーい、リンとそこの…」
頭をかきながらヤレヤレと面倒そうな顔をしながら戸を開けレンは声をかけた…が、次の瞬間リンの口から思わぬ言葉が飛び出したのをレンは聞き逃さなかった

「私、エンペラードラゴンの角を持っています」

「リンさん？」

トホシロは意外な言葉に驚いた顔をしていた…がここにもう一人？一匹？驚いている者がいた
「なっ…なにぃ？」
（何の話しているんだ？エンペラードラゴン？俺が何だって？）

リンの声はレンのところまでハッキリとは聞き取れなかったがエンペラードラゴンという言葉だけはわかった
「リ…」
リンを呼ぼうとしたがそれをさえぎる様に笑い声が講堂内に響き渡る

「あはははははははは」

声の主はトホシロだ、リンはもちろんその笑い声にはレンも何が起きたのか分からずただ呆然とした
「ト、トホシロさん？」
「ははは…嫌、ゴメン…君があまりにも真剣な顔をして叫ぶから」
「…気持ちはありがたいけど…神角を持っているなんて嘘はいけないよ？」
「私…嘘なんて…事実を…」

「リン！！」

レンの声が講堂内に大きく木霊する

「レンさん？」

リンが後ろを振り返ると扉の向こうにレンが二人を…いや、リンを呼びながらも目線はトホシロを睨んでいるのがわかる

「ちょっとこっちにコイッ！！」

「…ほらレン君が呼んでいるよ？」

「でも…あの…」

「いいから、ほら僕を睨んでいる…それに僕ももう寝ないと朝は薬草を積みに行きたいからね？」

「すみません…」

「オヤスミ、リンさん」

リンはレンの方へトコトコ歩みよるとレンは講堂に繋がる扉を閉めた、その時もう一度トホシロの顔を睨んで…

「…ありがとうリンさん」

「だけど…僕はまだ噛み殺されたくないからね？」

クスっと笑いトホシロは長椅子に横たわる、上を見上げると蝋燭の灯りのせいか何故か女神像の顔が悲しそうに見えた

「貴女に会えるまでは…元に戻すまでは僕は死ねませんから…」

ドンッ！！

部屋の戸を思いきり拳でレンは叩いた

「どういうつもりだ？」

「レンさん…もう夜も晩いんですよ？」

「あのな…今あいつと何の話をしていたんだ？」
「なんの話って…」
リンは俯いてレンの目を真っ直ぐ見ることができなかった…エンペラードラゴンの事で本人（レン）がいない時に思わず口走ってしまいそうになったからだ
「すみません…でも聞いてください…」
「私だって悪い事と分かっています…レンさんがいない時に…重要な事を話してしまいそうになった事は謝ります…でも…」
「なんだよ…」
ふとレンがリンの足元をみるとポツポツと薄くシミが出来ていく、よく見るとシミの原因となる水らしいものが俯いたリンの顔から落ちてきていた
（ギョッ！！もしかして泣いているのか？）
「あの…レンさん…聞いてください」
涙を浮かべながらリンは先ほどトホシロから聞いた事をレンに全部話した
「…で」
「はい…」
「お前あいつの話どこまで信じているんだ？」
「どこまでって…」
トホシロとの会話の内容をリンは話し終え涙も止まり目が少し赤くなっていた、しかしレンはリンに対して呆れ顔だ
「お前さ、まさかそんな話信じているのか？」
「はい、だってトホシロさんのあの顔…嘘をついているように思えませんでした」
「俺は角が薬になるなんて聞いたこともないぞ？」

「でも…」
「それに俺の角…神角お前にちょん切られているから今はないし？
まぁ、万が一ついていたとしてお前にお願いされてもアイツみたい
などこの馬の骨とも分からない奴にやる気はないし」
「レンさん！！」
「いいか？朝一番で出発だ…もちろんアイツが起きて来ないうちに
な？」
「…もうアイツのとこ行くんじゃないぞ？約束だ」
「……はい」
「じゃあ寝ろ」
そう言うとレンはリンに背中を向けベッドに潜り眠りについた

「……」
リンはベッドの上で膝を抱えて考え込んでいたが暫くすると自分の
カバンの中をゴソゴソ探し始めた
そしてハンカチに包まれた何かを取り出し確認するとその包みを抱
いて眠りにつくのだった。

約束したとおりレンとリンは早朝出発することにした
まだ日が昇りきっていないせいか外は薄暗く霧も漂っている

泊めて頂いたお礼にと戸口にリンは教会とトホシロに手紙を置いて
いこうとした…昨晩大事そうに抱えて眠ったものを紙に包んで一緒
にして
「じゃあ、いくぞ？リン」
「はい」
（どうかトホシロさんがこれに気が付いてくれますように…）

「あれ？早いんだね、もう出発かい？」

数メートル歩いた時、霧の向こうから声がした…誰かが近づいて来るのが影でわかった
「トホシロさん？」
「げっ…何でいるんだよ？」
「やだな？そんな露骨に嫌がらなくても…」
「俺が聞きたいのはどうしてこんな朝早く起きているのかって聞いているんだよ？まさか…お前待ち伏せか？」
「何って…ほら、薬草を積みに行っていたんだ？」
そう言うとトホシロは手に持っている葉をレンに見せた、それは昨日レンの筋肉痛を和らげた葉だ
「まだ旅を続けるんだろう？また同じ事にならない様に君に渡しておこうと思って摘んで来たんだけど…この葉は朝早く摘まないと枯れてしまうから」
「くっ」
「ありがとうございます、トホシロさん」
「ははは…でもレン君には迷惑だったみたいだね？」
「そんな事ないです！！ね？レンさん」
「……」
「はい、これ…使い方はわかるよね？」
「あっ、あぁ…」
トホシロは摘んできた数枚の葉をレンに渡した
「二人とも先を急ぐだろうから、引き止めるのはこれくらいにしておかないとね？」
「それじゃあ、またいつか会える事を祈っているよ」
そう言い手を振るトホシロ
「レンさん、ちょっと待っていてください」
「えっ？おい、リン」
リンは教会にかけて行き先ほど置いた包みを手にとりまた二人の元に戻ってきた

「トホシロさんこれ…本当は黙って置いていこうかと思ったのですが…」
「？なんだい」
トホシロはリンから包みを受け取り、そして手の平の上でそっとその包みを開けてみた。

「これは？」
その中にはオレンジ色に光る牙？骨？何かの欠片が包まれていた
なんだろうかとレンもその包みを覗き込む
（あーーーっ！！オレの角？！）
そう、その包みにはあろう事か初めてリンにあった時に切られたレンの後ろ髪？いや、今は形を変え角の欠片となり紙に包まれていたのだ
「おっ、おっ、お前それ！？オレの…」
レンはとっさにトホシロの手からその包みを取り戻そうと手を伸ばしたが間にリンが入って邪魔をされた

「それ…信じてもらえないかもしれませんがエンペラードラゴンの角…神角です」
「これが？」
「はい…どうかそれを使ってその…トホシロさんの大切な人を治して上げてください」
「でも、これがもし本物なら君にとっても大切なものなのでは？」
「いいんです、誰かの役に立てるならきっとこの角の持ち主だったドラゴンさんだって喜んでくれると思います。」
「そうですよね？レンさん」

（おいおい；；オレの意思は無視かよ）

リンは目を潤ませながら両手を顔の前で組んでレンに対しお願いの

ポーズを作る
「…仕方ないな…どうせあったところで、もうくっ付かないし；；」
ボソッとレンは小さくつぶやいた

「大丈夫だ、そいつは本物だ。オレが保障する」
「レンさん」
「保障って…レン君が？」
「あぁ、こいつの父親が傭兵で…昔オレ一緒に旅をしている時にそのエンペラードラゴンにバッタリ出くわして戦って勝ち取ったシロモノなんだよ」
レンの口は歪んでいた…とっさの嘘を思いつきでしゃべってはみたものの、まるで自分達がアスベルより弱い？みたいな気にさせられる

「あぁ、ちなみに戦って勝ったのはオレだけどな」
（これでよし！！）
自慢げに話し終わりレンは二人の方をチラッと見てみると、トホシロはポカーンと口を開いてレンを見ていたが、どうしたものかトホシロはお腹を押さえて後ろを向き笑い出した
「ク…クククッ」

「なっ、何がおかしいんだよ？」

「いや、ゴメン…ありがとう信じるよ、レン君強そうだものね？」
笑いをこらえながらトホシロはレンの方を見直す
「おう、オレは強いぞ？」
両腕を腰において胸をはるレン
「フフ…」
「リンさん」
クスクスとリンも二人の会話につられて笑っていたが声をかけられトホシロの顔を見る

「あっ、はいっ！！」
「ありがとう…これであの人のもとへと帰れる…あの人を助けてあげられる」
「二人とも本当にありがとう…いつかこのご恩は返すから…」
「そんな…恩なんていいです、ねぇ？レンさん」

「ん？あぁ」
流石にお礼を言われて嬉しいのかレンは顔が赤くなっていたので恥ずかしい為プイッと顔を横に向いた

「それじゃあ、用も済んだしサッサと行くぞ？」
そう言うとレンはリンをおいて歩き出した

「もうっレンさんったら；；」
「フフ…恥ずかしがりやなんだね？」
「すみません、では行きますね」
「うん」
「それじゃあ…さようなら」
「さようなら」
リンは頭を下げレンのもとへと駆けていく
その様子をトホシロは二人が見えなくなるまでジッと見守っていた

「本当にありがとう…感謝しますよ」

ザザザ・・・
二人が見えなくなって数分後、強い風が周りの草と木を揺らしトホシロのマントもなびかせ目の前を被う…風がとまった時、トホシロの目の前には一人の人物が立っていた。

その人物は長い黒髪を風に靡かせトホシロの元へと歩み寄る。
２５～２８歳くらいだろうか？切れ長の冷たい目をした美しい青年だ
「…手に入ったようだな」
「ええ」
「フッ、皇帝竜と言え所詮は子供だな」
「…」
「では、例の物をこちらに頂こうか？」
黒い髪の青年はトホシロの前に立ち手を出す
「…約束は守ってもらえるのだろうな？」
出された手を避ける様にトホシロは先ほどリンから受け取った包みをギュッと握り締め

「ここまで来て心配するのか？誰が今まで何の為にあの者の時を止めてあげていたと思う？」
「その事に関して感謝はしているさ…」
「ならばそれをこちらに…約束は守るお前の取り分は渡すから安心しろ」
「あぁ…」
その言葉を信じトホシロは受け取った包みを青年へと渡した
「これであの皇帝竜を…フフフ…」
青年は冷たい笑みを浮かべながらレンの角の欠片を握り締めた、その様子をトホシロは冷ややかな目で睨み付ける

「…フフ、その様な顔をするな？お前の取り分はある…手を出せ？」
そう言うと青年は欠片を見えない力で割り半分をトホシロへ渡した。
自分の元に戻ってきた欠片を手にしたトホシロはギュッと握り締め角の感覚を確かめる、するとトホシロの手から体中に何か暖かい感覚と安心感が広がる…先程まで紙に包まれていたので分からなかったが手の平で生に触れてそれが最強と言われるドラゴンの角だと言

う事が痛いほど分かった。

（これで…これであの人が救えるのか…）

「どうした？お前も触れてわかっただろう？これこそが我らには決して赦されない感覚、存在、そして力だ！！　フッ：ハハハハハハハハ…」

青年は髪を振り乱しながら狂った様に笑う、そしてその様子を冷ややかな視線でトホシロは見つめていた

「アハハッ…クッ…ククク……」

顔に当てた指の間から目を覗かせトホシロを凝視する

「……トホシロお前も約束を忘れるな？クククッ：」

「あぁ、この欠片が本当に効いたら…僕は貴方の命令に：下僕にでも何でもなってやるよ？」

「フフ…その言葉確かに聞いたぞ？宮廷お抱えの医師…トホシロ殿？」

ザザァ…

一瞬強い風が吹いた時、青年とトホシロはまるで陽炎が消えるかのようにその場から姿を消した。

その頃、レンとリンの二人はイーヴルへの道を歩いていた。

レンはスタスタと一歩前を歩いていた俯きながらもたまにチラッとリンはレンを見る…声をかけようとするが勇気がでない

トホシロと分かれた後、なぜか二人とも黙っていた…互いに言葉をかける事ができないで気まずい雰囲気が続く

「あのさ…リン？」
「？」
沈黙を破ったのはレンだった、その声にリンは俯いていた顔を上げる
「その…すまん…」
「え？」
いきなりレンが謝ってきたのでリンは少し驚いた
「あのさ、またオレ…嘘言ってしまったから…」

「嘘ですか？」

「あぁ…ほらオレがさ…あの角を戦って勝ち取ったシロモノだなんて嘘ついたからな」
本当はどうでもいい事なのだが、何か話題を作らなければとレンも必死である
そしてチラッとレンは横目で後ろを見る…とそこには今まで見た事もない笑顔で微笑むリンが立ち止まっていた
「レンさんは嘘なんかついてないですよ？」

（うっ…）

その笑顔を見たとたにレンは顔が真っ赤になり心臓が大きな音を鳴らす
（や、やば…なんでオレこんなドキドキしているんだ？）

「うふ」
「なっ、なんだよ？」
「だって…」
「？」
トトトッと歩いてリンはレンの腕をギュッと掴んだ後クルッと前に出てレンの顔を覗き込んでニコッともう一度微笑む

「だってレンさんが強いのは嘘じゃないですもの？ねっ？」
（うっ…）
「…ほっ、誉めたってぇ何にも出ないからなぁ」
体中が真っ赤になりレンは声も裏返っていた、動悸も早まる…それを悟られないようにレンは腕を振り払いスタスタと早歩きで歩きだした
「はい♪」
そんなレンを知ってか知らずかリンは嬉しそうな顔をして歩く
幸せそうな二人を追いかけるように青い一匹の蝶が空高く飛んでいる事を知らずに…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8056c/

エンペラードラゴン・マスター

2010年10月21日22時02分発行